

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：82606

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H03034

研究課題名(和文)AYA世代がん患者の意向に即した医療者へのコミュニケーション技術プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a communication skills training program for oncologists based on AYA cancer patient preferences

研究代表者

藤森 麻衣子(Fujimori, Maiko)

国立研究開発法人国立がん研究センター・がん対策研究所・室長

研究者番号：40450572

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文):横断調査により、AYA世代がん患者のコミュニケーションの意向を明らかにした。成人・高齢の患者を対象とした先行研究の結果と同様の傾向がみられた。また、気持ちのつらさの有症率は55.3%と高いこと、痛み、がん診断後の収入減少、がん診断後の仕事・学校生活の変化、社会的支援の不足が関連することを示した。

AYA世代がん患者とのコミュニケーションを学ぶためのオンラインCSTプログラム(AYA-CST)を開発し、実施可能性、有用性を検討した。AYA-CST受講前後で、受講者6名の自信が高くなったこと、プログラムに対する評価が高かったことから、AYA-CSTは実施可能であり、有用である可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で開発したAYA世代がん患者と医療者のコミュニケーション技術研修プログラムの実施可能性、有用性が示唆された。このプログラムは、今後、日本サイコオンコロジー学会CST委員会と協力し、学会の事業としての開催されることによって全国に普及され、最終的にはAYA世代がん患者と医師の望ましいコミュニケーションを促進し、患者の情報ニーズが満たされることで、患者が安心して治療を受けることが可能となり、生活の質の向上が期待される。

研究成果の概要(英文):The cross-sectional survey clarified the communication preferences of Japanese young adult cancer patients regarding the disclosure of bad news, and the tendency was almost the same as the results of the communication preference surveys of adult and elderly patients which we had conducted. In addition, we showed that the prevalence of psychological distress was 55.3% (114/206) among young adult cancer patients. Pain, decrease in income after a cancer diagnosis, experience of negative change in work/school after a cancer diagnosis and poor social support were significantly associated with psychological distress.

Our developed online AYA-CST program, which has not yet been worked on worldwide, seemed feasible and might be applied to physicians who experience difficult communication situations with AYAs with cancer.

研究分野：人間科学、臨床心理学、行動科学

キーワード：コミュニケーション AYA 患者 医療者関係 コミュニケーション・スキル・トレーニング がん

## 1 . 研究開始当初の背景

思春期・若年成人 (Adolescent and young adult; 以下 AYA) 世代の患者は、治療に関する話し合いに参加する能力を有しているし、参加することを望んでもいる (Lyon et al., J Adoles Health, 2004)。さらに AYA 世代の患者は就学・就労や妊孕性といった世代特異的な問題を有している。しかし、医療者は話し合いをする準備ができていない、知識やスキルがない、話し合いの準備をし、患者の反応に対応する時間がない等の問題を抱え (Thompson et al., Soc Work Health Care, 2013; Legare et al., Pat Educ Conus, 2008) AYA 世代患者と十分なコミュニケーションが行われているとは言い難い。さらに AYA 世代のがん患者数は全がん患者に占める割合は 2.5% (Hori et al., Jpn J Clin Oncol, 2015) と少数であることから、十分な検討が行われにくい現状がある。

医師が望ましいコミュニケーションを習得する方法として、コミュニケーション技術研修会がある。講義、ロール・プレイ、ピアディスカッションを含む少人数でのグループ・ワークであり、系統的レビューで医師の望ましいコミュニケーション行動や自己効力感の増加により有効性が示されている (Moore et al., Cochrane Database Syst Rev, 2013)。我が国においても、申請者らが、がん患者の望むコミュニケーションに即した CST を開発し、無作為化比較試験により、上記有効性に加え、患者の抑うつ の低さ、信頼感の高さからその有効性を世界で初めて示した (Fujimori et al., J Clin Oncol, 2014)。しかしながら、AYA 世代がん患者とのコミュニケーションに着目した研修プログラムの開発およびその有効性の検討は世界的に行われていない。

## 2 . 研究の目的

本研究の目的は、AYA 世代がん患者を対象とした質問紙調査により、AYA 世代がん患者の医療者とのコミュニケーションへの意向と関連要因を明らかにし、AYA 世代がん患者の診療に携わる医療者および精神保健福祉の専門家による調査結果に基づく合議により、医療者を対象とした AYA 世代がん患者とのコミュニケーション技術研修プログラムを開発し、日本サイコオンコロジー学会主催で行われている医療者を対象としたコミュニケーション技術研修会のプログラムに反映させ、その有効性を検討することである。

## 3 . 研究の方法

研究(1) : AYA 世代患者のコミュニケーションの意向と関連要因を検討するために、民間モニター業者に登録しているパネルを対象に、16-39 歳のがんの診断を受けて医療機関を受診中の者をスクリーニングし、研究対象候補者に対して調査を配信した。調査項目は患者背景、コミュニケーションに対する意向(70 項目)、ソーシャルサポート、気持ちのつらさ(Kessler Psychological Distress Scale 6)であった。

研究(2) : AYA 世代がん患者と医療者のコミュニケーション技術研修プログラムを開発するための委員会を構築し、プログラムを作成する。

研究(3) : 研究(2)において開発されたプログラムを日本サイコオンコロジー学会主催コミュニケーション技術研修会のためのファシリテーター養成講習会修了者を対象に実施し、プログラ

ム参加前後の参加者の AYA 世代とのコミュニケーションに対する自信、プログラムの有用性を評価する。

#### 4. 研究成果

研究(1)：調査参加者は 206 名、男性 26 名(12.6%)、女性 180 名(87.4%)、調査時の平均年齢 33.7 歳(標準偏差 4.3、範囲 22-39 歳)、がん診断時の年齢 29 歳以下 111 名、30~39 歳 95 名であった。再発・転移のない患者 164 名(79.6%)、ある患者 15 名(7.3%)、わからない患者 27 名(13.1%)、がん診断からの 1 年未満の患者 33 名(15.9%)、1 年以上 5 年未満の患者 105 名(51.0%)、5 年以上の患者 68 名(33.0%)、PS0 の患者 147 名(71.4%)、PS1 の患者 59 名(28.6%)であった。伝えられた最も悪い知らせは、「がんの診断」136 名(66.0%)、「がんの再発・転移」44 名(21.4%)、「がんの進行」13 名(6.3%)、「治療を中止すること」2 名(1.0%)、その他(妊孕性がなくなること、がんが治らないこと、余命を伝えられたことなど)11 名(5.3%)であった。意向の高いコミュニケーションは、「今後の治療方針も伝える」、「あなたの質問にも答える」であった。一方、意向の低いコミュニケーションは、「あいまいに伝える」、「好ましくない知らせのみを伝える」、「いらいらした様子で対応する」であった。調査を行った若年成人のコミュニケーションに意向はこれまでに我々が行った成人・高齢の患者のコミュニケーションの意向調査の結果(Fujimori et al., Psychooncology, 2007)と概ね同様の傾向がみられた。K6 カットオフ値 5 点とした気持ちのつらさの有症率は 55.3%(114/206)であった。ロジスティック回帰分析の結果、痛み、がん診断後の収入減少、がん診断後に仕事・学校生活が変化した経験、社会的支援の不足は気持ちのつらさと有意に関連がみられた。

研究(2)：日本サイコオンコロジー学会主催コミュニケーション技術研修会のためのファシリテーター養成講習会修了者 118 名を対象に参加者を募り、AYA 世代がん患者と医療者のコミュニケーション技術研修プログラム(AYA-CST)を開発するための委員会を構築した。委員の構成は、AYA 世代がん患者の診療に携わる医療者および精神保健福祉の専門家 30 名(医師 22 名、心理士 7 名、看護師 1 名)であった。会議では、AYA-CST の目的、プログラム構成と内容、ロール・プレイの設定、シナリオについて話し合い、コンテンツを作成した。

研究(3)：研究(2)において開発した AYA-CST プログラムを日本サイコオンコロジー学会主催コミュニケーション技術研修会のためのファシリテーター養成講習会修了者を対象に、第 1 回 2020 年 12 月 13 日、第 2 回 2022 年 2 月 6 日にオンライン開催した。第 1 回は受講者 3 名(緩和ケア科 2 名、血液内科 1 名)で、開催後に受講者からプログラムに関する改善点・意見をアンケート調査し、内容を委員で話し合い、シナリオ・プロトコルを修正し、模擬患者用マニュアルを作成した。第 2 回は受講者 6 名、平均年齢 51 歳、血液内科 2 名、産婦人科 2 名、緩和ケア科 2 名、がん診療経験年数平均 24 年、年間 AYA 世代がん患者診療数 5-10 人：3 名、11 人以上：3 名であった。AYA 世代がん患者とのコミュニケーションに対する自信に関し、概ね参加後により高い自信が示された。研修会の評価は概ね良好であり、研修会全般の満足度も高かった。開発された AYA-CST プログラムは実施可能であり、参加者評価から有用である可能性が示唆された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 Sato Ayako, Fujimori Maiko, Shirai Yuki, Umezawa Shino, Mori Masanori, Jinno Sayaka, Umehashi Mihoto, Okamura Masako, Okusaka Takuji, Majima Yoshikyuki, Miyake Satoshi, Uchitomi Yosuke	4. 巻 -
2. 論文標題 Assessing the need for a question prompt list that encourages end-of-life discussions between patients with advanced cancer and their physicians: A focus group interview study.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Palliative and Supportive Care	6. 最初と最後の頁 1~3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S1478951522000153	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Okamura Masako, Fujimori Maiko, Goto Shinichi, Obama Kyoko, Kadowaki Midori, Sato Ayako, Hirayama Takatoshi, Uchitomi Yosuke	4. 巻 -
2. 論文標題 Prevalence and associated factors of psychological distress among young adult cancer patients in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Palliative and Supportive Care	6. 最初と最後の頁 1~7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S1478951521002054	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Chen Shih Hsiang, Chen Shih Ying, Yang Shu Chun, Chien Rong Nan, Chen Sue Hsien, Chu Tsuei Ping, Fujimori Maiko, Tang Woung Ru	4. 巻 30
2. 論文標題 Effectiveness of communication skill training on cancer truth telling for advanced practice nurses in Taiwan: A pilot study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Psycho-Oncology	6. 最初と最後の頁 765~772
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/pon.5629	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Okamura Masako, Fujimori Maiko, Sato Ayako, Uchitomi Yosuke	4. 巻 21
2. 論文標題 Unmet supportive care needs and associated factors among young adult cancer patients in Japan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Cancer	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12885-020-07721-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Chen Shih-Ying, Fujimori Maiko, Wang Hung-Ming, Tang Woung-Ru	4. 巻 Publish Ahead of Print
2. 論文標題 Gender Differences in Cancer Patients' Preferences for Truth-Telling in Taiwan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Cancer Nursing	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1097/NCC.0000000000000856	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Mori Masanori, Fujimori Maiko, Vliet Liesbeth M., Yamaguchi Takuhiro, Shimizu Chikako, Kinoshita Takayuki, Morishita Kawahara Miki, Inoue Akira, Inoguchi Hironobu, Matsuoka Yutaka, Bruera Eduardo, Morita Tatsuya, Uchitomi Yosuke	4. 巻 125
2. 論文標題 Explicit prognostic disclosure to Asian women with breast cancer: A randomized, scripted video vignette study (J SUPPORT1601)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Cancer	6. 最初と最後の頁 3320 ~ 3329
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/cncr.32327	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mori Masanori, Fujimori Maiko, Ishiki Hiroto, Nishi Tomohiro, Hamano Jun, Otani Hiroyuki, Uneno Yu, Oba Akira, Morita Tatsuya, Uchitomi Yosuke	4. 巻 57
2. 論文標題 The Effects of Adding Reassurance Statements: Cancer Patients' Preferences for Phrases in End-of-Life Discussions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Pain and Symptom Management	6. 最初と最後の頁 1121 ~ 1129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jpainsymman.2019.02.019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Mori Masanori, Fujimori Maiko, Ishiki Hiroto, Nishi Tomohiro, Hamano Jun, Otani Hiroyuki, Uneno Yu, Oba Akira, Morita Tatsuya, Uchitomi Yosuke	4. 巻 24
2. 論文標題 Adding a Wider Range and "Hope for the Best, and Prepare for the Worst" Statement: Preferences of Patients with Cancer for Prognostic Communication	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Oncologist	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1634/theoncologist.2018-0643	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Masako Okamura, Maiko Fujimori, Shinchi Goto, Kyoko Obama, Midori Kadowaki, Ayako Sato, Yosuke Uchitomi
2. 発表標題 Prevalence and associated factors of psychological distress among survivors of adolescent and young adult cancer in Japan.
3. 学会等名 The 22nd World Congress of Psycho-Oncology & Psychosocial Academy (IPOS2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡村優子、藤森麻衣子、佐藤綾子、内富庸介
2. 発表標題 若年成人がん患者における支援へのニーズと関連因子の検討
3. 学会等名 第二回AYAがんの医療と支援のあり方研究会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内富庸介
2. 発表標題 エビデンスに基づくコミュニケーション:心の声を聴く
3. 学会等名 第24回日本緩和医療学会学術大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内富庸介
2. 発表標題 がん予防から終末期におけるコミュニケーションスキル
3. 学会等名 第57回日本癌治療学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内富庸介・塩飽哲生・藤森麻衣子
2. 発表標題 オンライン通話システムを使ったがん患者の「心のケア」拡大の可能性について
3. 学会等名 第32回日本サイコオンコロジー学会総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤森麻衣子
2. 発表標題 会長企画シンポジウム「コミュニケーション・スキルを科学する」
3. 学会等名 第57回日本癌治療学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤森麻衣子
2. 発表標題 会長企画シンポジウム「サイコオンコロジー：がん治療の進歩によって患者・医療者間のコミュニケーションは変化したのか」
3. 学会等名 第17回日本臨床腫瘍学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤綾子、藤森麻衣子、上野絵、三井明子、神野彩香、梅橋海歩人、猪股尚美、畑琴音、内富庸介
2. 発表標題 若年成人世代がん患者が医師と悪い知らせを話し合う際の医師のコミュニケーションに対する意向調査
3. 学会等名 日本サイコオンコロジー学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	内富 庸介  (Uchitomi Yosuke)  (60243565)	国立研究開発法人国立がん研究センター・がん対策研究所・ 研究統括(支持・サバイバーシップ研究)  (82606)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------